月夜に消える

佐々木赫子・作
宇野亜喜良・絵

赤い鳥文庫

赤い鳥文庫

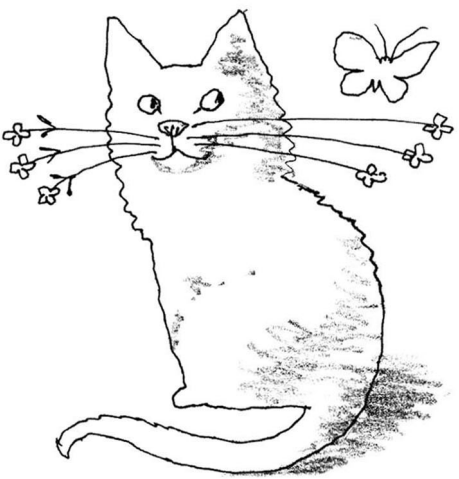
月夜に消える

佐々木赫子・作
宇野亜喜良・絵
赤い鳥の会・編

●月夜に消える
●著　者　佐々木赫子
●画　家　宇野亜喜良
●編　者　赤い鳥の会
●発行者　小峰紀雄
●表紙印刷　合資会社　斎藤印刷所
●本文印刷　株式会社　厚徳社
●製　本　小高製本工業株式会社
●発行所　株式会社　小峰書店
東京都新宿区市谷台町四―一一〒一六二
振替口座　東京六―一九五五四四番
電話　〇三(三五七)三五一一
一九八八年　七　月　一　日　第一刷発行
一九八八年　一〇月三〇日　第二刷発行
ISBN4-338-07802-2
©1988 Printed in Japan
●――乱丁・落丁はお取り替えいたします。
NDC913 22cm 160P

目次

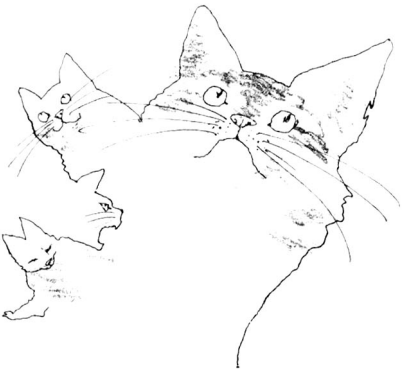
月夜に消える……4
登る……52
遠い声……87
たて笛ふこう……117



装幀・松永禎郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月夜に消える



月夜(つきよ)に消(き)える

（一）

夏休みの夕方だった。

ぼくは、家の近くで石井のおばさんに出会ってしまった。石井のおばさんとは、同じアパートの隣りどうしだ。

わき道へそれるにも、何かに見とれておばさんに気がつかないふりをするにも、おそすぎた。すでにおばさんはショッピング・カーをひっぱって、ぼくの目のまえにきていた。

しかたがないので、ぼくは野球帽をとり、おじぎした。

「おつかい、いつもえらいわねえ。おばさん、みんなに言ってるんだよ。あんないい子はいまどきめったにいないって。家のてつだいはよくするし、ぎょうぎはいいしって」

例によっておばさんは、ぼくのさげているスーパーマーケットの袋をのぞきこんだ。

ぼくはいらだつ気持ちをさとられないように、あいまいに笑って足をはやめてすれちがった。

ぼくはこのごろ、石井のおばさんがなんとなくうっとうしくてならない。

去年の夏この団地にひっこしてきたころは、石井のおばさんのことを、なんてしんせつな人だろうと思ったものだった。

ひっこしの翌日だったか、弟が熱をだしたのにアイスノンがどこかにまぎれこんで見つからなかった。新しいのを買うつもりで、薬局がどこにあるのか聞きにいったのがお隣りと顔をあわせたはじまりだった。

石井のおばさんは、(もったいないから、買うのはおよしよ。見つかるまで、うちのを使っとけばいいやね)と言い、アイスノンをぼくにわたさないで、わざわざ自分で持ってきた。

そのときは、おばさんが家の中をじろじろ見まわしてなんやかや質問していったのもべつに気にならなかった。おかあさんとぼくはしんせつなお隣りにあたってよかったねと、よろこびあったものだった。

一年たった今では、あの日のうちに「こんどきたお隣り、離婚したんだってさ」と、近所に報告して歩いたにちがいないと思っている。

まだ暗くはなっていなかったが、団地のどの棟の階段灯も、明りをともしていた。

ぼくは自分のアパートの共同郵便受けから夕刊をとろうとして、郵便受けの上におきわすれられているラジコン・カーを見つけた。

この近所でラジコン・カーを持っているのは三階の五年生のやつだけだ。

まわりを見まわしたかどうか、おぼえていない。気がつくと、ゴキブリのひげのようにアン

テナをぴんと立てたラジコン・カーをつかんで階段をかけ上がっていた。

とちゅうで持ち主がおりてくるのに出会ったら、（ほら、わすれもの。持ってきてやったぞ）とわたせばいい。頭のどこかで、そんなふうに考えていたような気もする。

もしじっさいに出会ったらいかにも上級生らしく、やつの頭をかるくたたいて、（こんなだいじなものを、外にほっとくやつがあるかよ。ぬすまれちまうぜ。気をつけな）とでも言ったかもしれない。

だが、だれにも会わなかった。ぼくは三階のやつの家のまえを走りぬけ四階へ急いだ。

この階の一軒の方は夫婦とも八時すぎなければ勤めから帰ってこない。もう一軒の和田という老人は一人ぐらしで、こちらもこの時刻にはいつもるすだ。

和田さんはパートタイムで夜だけ隣り町の図書館で働いている。聞き出したのは、もちろん石井のおばさんだった。（年金のたしにパートで働いてるんだろうね。それでも、やっぱ、たべるの苦しいみたい。スーパーで魚のあらを買ってるの、よく見るもんね）とそんなことまで、おばさんは言っていた。

四階までかけ登ったので、さすがに胸が苦しかった。ぼくは和田さんの家のまえで足をゆるめ、大きく息をすった。

ふいに目のまえのドアがあいて、和田さんが顔を出した。
ぼくはとび上がった。ラジコン・カーを一方の手にさげていたスーパーの袋でかくしながら、
「こんにちは」と必要以上に大きな声をだした。
和田さんが何か返事をしたが、よく聞きとれなかった。
ぼくは耳がかっと熱くなった。
「雨が降りそうだよ。洗濯物はベランダに出しとかない方がいいよ」
和田さんはだまっていた。
ぼくはくるりと和田さんに背を向けて、口笛をふきながら五階へ向かった。
おかあさんはもう保険会社の仕事からもどってきて、台所で晩飯を作っていた。弟は六畳間でテレビを見ていた。ぼくは弟のうしろを通って、隣りの四畳半の部屋へ行き自分の机のうしろにラジコン・カーをおしこんだ。それから買い物を台所へ持っていった。
夕食をすませると、ねむたいからと言ってぼくは四畳半にひっこんだ。ふとんをしいてもぐりこみ、タオルケットを頭の上までひっかぶった。眠れなかった。
（じいさんは、うまくごまかせた）そう自分に言いきかせようとした。
（買い物の袋でかくしたから、気がつかなかったろう）（あんな年寄りだもの、見たってラジコ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

403

ン・カーだなんて何かわかるはずがない。まして、あれをどの子が持ってて、どの子がもってないか、知ってるわけがない）（それどころか、三階の五年のやつとぼくの見わけだってついてやしないさ）

「いや、だめだ」

ひとりでに自分の口から言葉がこぼれ落ちて、ぼくをぎくりとさせた。

三階のやつがラジコン・カーをなくしたうわさは、すぐに石井のおばさんに伝わるだろう。そうなれば、和田さんの耳にとどかないとは言いきれない。近所づきあいのない和田さんだが、石井のおばさんとだけは少しは話をしているらしいから。

和田さんがラジコン・カーのことを聞けば、（そういえばあのときあの子が）ということになるかもしれない。ぼくの耳はまた熱くなってきた。

ラジコン・カーを買い物の袋でかくそうとしたこと。日ごろ階段で行きあっても、こんにちはとしか言わないのに、とつぜん今日にかぎって洗濯物がどうのと、年とった女の人でもが言いそうなことを口ばしったこと。いきなり口笛をふきだしたこと。どれもこれも不自然すぎた。和田さんはかえって不審に思ったにちがいない。

ぼくの耳はこんどは急につめたくなった。

「ちくしょう。ばか、ばか」
どじな自分をののしって、こぶしで枕をたたいた。
おかあさんがでかけていくけはいがした。夕食後ラーメン屋で、毎晩十時まで皿あらいのアルバイトをしているのだ。
弟はまだテレビを見ている。
（じいさんが石井のおばさんに言いつける）（ぜったい、石井のおばさんは団地じゅう言いふらす）（もうおしまいだ）（やっぱ欠損家庭の子だねえ。おばさんは気のどくがるふりをしてそう言うにきまってる。ぼくは、なんてばかだったんだろ）
ふっと、四階のおどり場の階段灯が切れかけていたのを思い出した。
（そうだ。うす暗かったんだ。おまけに、ちかちかしていた。じいさん、目だってしょぼしょぼしてるし）
「ぜったいに、見えたわけがない」
ぼくは自分に向かって宣言した。ぼくはタオルケットから顔を出すと、それ以上何も考えないために、歌をうたいだした。知っている歌を次からつぎへうたっているうちに眠ってしまったらしい。

（二）

暗やみの中で目がさめた瞬間、ぼくの頭にうかんだのは、（おそらく、ばれずにはすむまい）というのと（ラジコン・カーがあったところで、それで遊ぶわけにはいかない）という、二つのことだった。

団地の小学生なかまなら、ラジコン・カーを持っているのが三階のやつだけだと、みんな知っている。やつがなくしたあとで、ぼくが買ってもらったと言って持ち出しても、ぼくの言うことを信じるものがいるだろうか。もし、ぼくが団地のほかのなかまの一人だったら、信じない。

こっそり家の中で走りまわらせるには、部屋がせますぎる。弟の目をごまかすのもむずかしい。ラジコン・カーは戸外の広くて平らな場所がなければつかえない遊び道具だ。

（すててこよう。それもできるだけ早く）

ぼくは首をもたげて、あたりのようすをうかがった。隣りの寝床で弟が寝息をたてている。ふすまごしにおかあさんのいびきも聞こえてくる。おかあさんは最近よくいびきをかくようになった。

ぼくは寝床からはい出して、窓のカーテンのすそをめくってみた。月夜だった。向かいのアパートの窓のうち明りがともっているのは一軒だけで、ほかはみな暗かった。

ぼくはさっきかくしておいたラジコン・カーを、音をたてないように用心しいしい机のうしろから、手さぐりでとり出し、ぬぎすててあるシャツをやはり手さぐりで見つけた。

気をつけてそっと家を出、足音をしのばせて階段をおりていった。

夕方、和田さんに雨が降りそうだなどとでたらめを言ったけれど、降るどころか、ちょっとふちのかけた月が西の空にうかんでいた。

それぞれのアパートのまえの芝生に、建物の四角な影が落ちている。しずかだった。

窓からのぞいている人がいるとは思えなかったが、ねんのため明るい所をさけて影になっている芝生の部分をふんでいった。すぐにスニーカーが露でびしょぬれになるのが感じられた。

ぼくは団地のまん中にある小さな広場に、ラジコン・カーをおいてくるつもりだった。そこは小学生が学校の行き帰りにかならず通る通り道にあたっている。

車がはいってこないその広場はマツやツツジなどにかこまれていて、陶器のトビウオのかざりがある水飲み設備があり、ぼくらの遊び場でもあった。

ラジコン・カーを見つけた所にもどしておこうとか、持ち主の家のまえにおいてこようとか

は、ぜんぜん考えなかった。

（ちったあ、べそかいて探しまわるがいいや。ふん、見せびらかしやがって）

マツの木の下に立って、ぼくはちょっとあたりを見まわした。団地のあちこちは街灯もあって、まっ暗ということはない。アパートの窓まどが月をてりかえして光っていた。昼間はわからないマツのにおいがしていた。

こんな夜中におきているのも、一人で外にいるのも、はじめてだった。クラスの友達のだれもみな、今ごろはぐっすり眠っているにちがいない。自分のだいたんさがほこらしくなった。

ものかげばかり選んでこそこそ歩いているのがばからしくなった。ぼくは胸をそらして月光のさしている中へふみ出した。

「なあぁおぉん」

しわがれ声が聞こえた。ぎょっとして声のした方をふりかえると、ツツジのしげみのかげに緑色の目が二つ光っていた。

緑色の目は明るい所へ走り出てきた。ネコだった。ネコはこちらに近づいてきた。が、ぼくには目もくれず、目的ありげに風をきって通りすぎていった。

あっけにとられていると、ちがう方で芝生をふむかすかな音がした。またネコだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com